今昔物語集の慣用句「此ヲ聞テ」「此ヲ見テ」の成立

藤井俊博

はじめに

『今昔物語集』の中で頻出する「此ヲ聞テ」「此ヲ見テ」は、漢文の「聞此」「見此」に対応する一種の翻読語と考えられる。このような慣用句は本邦の漢文や変体漢文にも見られるが、とりわけ『大日本国法華経験記』等の出典類の影響を受けて成立したと考えるべき徴表を持っている。本稿では、この点を踏まえつつ、和文や漢文の用例①と比較したり、『宇治拾遺物語』の類話の表現と対比したりすることで、本書の表現形成の方法に迫りたい。

一、漢文における「聞此」「見此」

『今昔物語集』の慣用句「此ヲ聞テ」「此ヲ見テ」の成立を考えるためにまず、漢文による影響を考えたい。『今昔物語集』での用例の多さに関わらず、後述のように平安期の和文においては用いられる作品に偏りがあり、何らかの文体の制約によって用いられていると考えられるからである。「此ヲ聞テ」「此ヲ見テ」の漢文で対応する表現として「聞此（是・之）」「見此（是・之）」のような表現が挙げられるが、この表現は、仏典において容易に例を挙げることができる。法華三部経の類から例を取ると、

1我等見此。得未曾有。（『法華経』譬喩品）
2窮子聞之。歓喜随来。（『法華経』信解品）

のように単独で「見此」「聞之」となる場合と、

3聞此教勅已。心大歓喜。（『仏説観普賢菩薩行法経』）
4貧人見此珠、其心大歓喜。（『法華経』法師品）

のように「聞此～」「見此～」の形になる場合とが見られる。右の例に共通するのは、何かを見聞きしたことによって、ある感情

（感情を示す部分を……線で示す。以下同じ）を起こすいう点である。このような類例の中には、負の感情に続く例もあり、たとえば、

5 一者所未聞深経。聞之驚怖生疑不能随順。（『維摩詰所説経』嘱累品）

6 時我世尊。聞此語茫然不識是何言。（『維摩詰所説経』弟子品）

のような例がある。また、『大智度論』には、「聞此（是）～」「見此（是）～」が多数見られ、多様な用法で用いる。類例を挙げると、

7 王聞此語。驚怖堕床如熱沙。（巻三）

8 乞食具聞此事。増益恭敬佛力。（巻一七）

9 檀越見此輩。歓喜迎入坐坐已。（巻二二）

10 若是菩薩見是事聞是事。心不動不疑不驚作是念。（巻七三）

のように用いている。このように『大智度論』では、右の「聞此事」「聞此語」の他に、「法」「偈」「説」「声」などと結びつき、深遠な言説に接してある感情（畏怖や歓喜など）を喚起するという文脈に用いている例が多い。これらの仏典の用例を見ると、単に次の動作を導くだけの場合もあるが、多くは何かを見たり聞いたりすることが、何らかの感情（またはその結果としての行為）を催す契機になるという類型があると考えられる。また、「聞」「見」に後続する目的語としては、『大智度論』に挙げたように、「聞此語」「聞此事」「見是事」等の例がある点も注意される。これは後述の『今昔物語集』に見られる「此ノ語ヲ聞テ歓喜踊躍シテ」（三・24）「此ノ事ヲ聞テ亦哭キ悲テ」（一・23）「何ゾ此ノ事ヲ見テ汝一人不喜ザルゾ」（二・23）などの表現と対応する形式である。『今昔物語集』では右のように一見不自然な形の「此ノ事ヲ見テ」を用いているのであるが、これも右のように仏典から「見是事」の形式を見出すことができ、「此ヲ見テ」の場合と同様に、漢文の表現の訓読として生まれたものと思われるのである。

ただし、このような形式・用法は仏典にのみ見られるのではなく、漢籍においても、「聞之」「見之（此）」の字面で多くの用例を見出すことができる。『文選』『白氏文集』の例の一部を次に挙げておく。

11 聞之者悲傷見之者隕涙。（『文選』巻一三・鸚鵡賦）

12 君侯昔有美玦。聞之驚喜。（『文選』巻四二・與鍾大理書）

13 誠知老去風情少。見此争無一句詩。（『白氏文集』巻一七）

14 我是知戯者。聞之涕泫然。（『白氏文集』巻一）

15 凡是為善者。聞之惻然悲。（『白氏文集』巻二）

16 幽鳥時一声。聞之似寒蟬。（『白氏文集』巻六）

用法は仏典と同じく感情などを導く用法でも用いているが、両書には「此事」「此語」などとともに用いた例は見られなかった。

また、本邦における漢文では、『古事記』に、

17 爾天佐具賣聞此鳥言而。語天若日子言。此鳥者其鳴音甚惡。

の一例があるのみで、「聞之」「見之」の例が見られないが、『日本書紀』では「見之（此）」14例、「聞之」42例が見られる他、「このこと」を目的語に取る例が、

18時天皇聞是言則。仰中臣連祖探湯主。（巻六　垂仁天皇）
19天皇聞是語。遣物部兵士三十人。（巻一四　雄略天皇）
20我聞此言。立思矣。居思矣。未得其理。（巻二三　舒明天皇）

などのように三例が見られる。

仏教説話集では、『今昔物語集』の出典である『日本霊異記』に「見之」が91例、「聞之」が62例と例が多く、『大日本国法華経験記』に「見之」が27例、「聞之」が11例の用例があり、「父母聞之。流涙喜悦」（巻上・三二）のように用いている。また、『大日本国法華経験記』には『大智度論』に見られた、「見此事」が1例、「聞是語」が3例「聞此事」が9例見られ、『今昔物語集』の「此ノ事ヲ見テ」「此ノ事ヲ聞テ」に当たる形を用いる事が注目される。

21比丘見此事。彌生信心。（巻中・七五）
22聞是語已。生奇特心。（巻上・一九）
23牛聞此事。流涙悲泣。（巻下・一〇六）

往生伝類では、「聞之」が『日本往生極楽記』に4例『拾遺往生伝』に3例見られる他、『拾遺往生伝』に、

24神主貞政具聞此言。垂涙曰。（二三）
25有一比丘。則同聞此事。行彼上人許。問訊結縁。（三一）

など「此事」「此言」を目的語にした例が見られる。

一方、変体漢文でも古文書や公家日記の類でも用例が多く見られる。（表一）にその用例数を示す。これらの文献の中で、「此事」「是事」などを目的語に取る例は、次の『御堂関白記』の一例が見られるのみで一般には用いないようである。

26門典侍令申云々。聞是事経日来由被仰。（『御堂関白記』）

（『御堂関白記』長和四年六月十四日）

このように、漢文においては、「聞之」「見之」の用例は和漢の文献を問わず容易に見出すことができるが、「聞此事」「見此事」の表現は、どちらかと言えば、仏典系統に多く見られるようである。本邦の漢籍系統の文章では、『日本書紀』の他に『本朝文粋』に、

27而今乍聞此語。昼夜悲泣。（『本朝文粋』巻第七　三善相公「奉左丞相書」）

（表一）

作品	見之	聞之
平安遺文	9	5
小右記	91	10
御堂関白記	49	2
後二条師通記	47	11
殿暦	208	5

28余毎歴此路見此事。莫未嘗為之長大息矣。
（『本朝文粋』巻第九　大江以言「見遊女」）

のような例もあり、必ずしも仏教漢文特有とはいえないのであるが、これらは、仏教漢文での慣用的に用いる表現と思われ、感情の描写に伴って現れることや、本邦の仏教漢文では『大日本国法華経験記』などの出典となった文献に多く見られることに注意しておきたい。

二、和文の「これを聞きて」「これを見て」

右のような漢文の用例に対して平安期の和文体の文献においては、一般にこれらの慣用句は偏った作品にしか見られない。

まず、女性の作者による『源氏物語』『枕草子』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』には「これを聞きて」「これを見て」の用例は一例も用いられておらず、これに対応する表現を探すならば、

29わが御影の鏡台にうつれるが、いときよらなるを見たまひて、手づからこの紅花を描きつけ、にほはしてみたまふに、かくよき顔だに、さてまじれらむは見苦しかるべかりけり。姫君見て、いみじく笑ひたまふ。
（『源氏物語』末摘花）

のように、「見て」単独で表し感情表現につなげる例や、

30さも騒がればと、ひたぶる心に、ゆるしきこえたまはず。御乳母参りてもとめたてまつるに、けしきを見て「あな心づきなや。げに、宮知らせたまはぬことにはあらざりけり」と思ふにいとつらく、
（『源氏物語』乙女）

31行のほど、端ざまに筋かひて、倒れぬべく見ゆるを、うち笑みつつ見て、さすがにいと細く小さく巻き結びて、撫子の花につけたり。
（『源氏物語』常夏）

のように、感情を起こす対象を目的語とする例や、感情表現を平行した動作とする例がある。右の他、『夜の寝覚』『狭衣物語』『浜松中納言物語』『大鏡』にも例がなく、僅かに『栄華物語』に「これを聞きて」三例があるのみである。ところが『竹取物語』には敬語の例も含め20例（「これを聞きて」13例）もの例があり注意される。

32「くらもちの皇子は優曇華の花持ちて上り給へり」とのゝしりけり。これをかぐや姫聞きて、我は皇子に負けぬべしと、胸うちつぶれて思ひけり。
（『竹取物語』蓬莱の玉の枝）

33御子は我にもあらぬ氣色にて、肝消えぬ給へり。これをかぐや姫聞きて、「この奉る文をとれ」と言ひて見れば、文に申けるやう、
（『竹取物語』蓬莱の玉の枝）

34かひはなく有ける物をわひはて、しぬる命をすくひやはせぬ、とかきはつる、たえ入給ひぬ、これをきゝて、かくや姫すこしあはれとおほえけり
（『竹取物語』燕の子安貝）

35風いとおもき人にて、はらいとふくれ、こなたかなたのめには、すもゝをふたつゝけたるやう也。これを見たてまつりて、その國のつかさもほうゑみたる　（『竹取物語』龍の頸の玉）

36大空より人、雲に乗りて下り來て、土より五尺ばかり上りたる程に、立ち列ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるゝやうにて、あひ戰はん心もなかりけり。

（『竹取物語』かぐや姫の昇天）

また、『宇津保物語』は俊陰巻のみの調査であるが、次の例がある。

37鶴、いとあはれに、うち鳴きて渡る。この君、これを聞きて、まして悲しさまさりて、　（『宇津保物語』俊陰巻）

さらに、『伊勢物語』『大和物語』には、次の計3例がある。

38おくに、手を折りてあひ見し事をかぞふればとをといひつゝ四つは経にけり。かの友だち、これを見て、いとあはれと思ひて、夜の物までおくりてよめる。　（『伊勢物語』第十六段）

39あけて見れば、よろづのことども書きもていきて、月日など書きて、奥の方にかくなむ。「玉くしげふたとせあはぬ君が身をあけながらやはあらむと思ひし」。これを見てなむ、かぎりなく悲しくてなむ、泣きける。　（『大和物語』第四段）

40それが顔を見るに、その人といふべくもあらず、いみじきさまなれど、わが男に似たり。これを見て、よく見まほしさに、

（表二）

作品	これを聞て	これを見て
三宝絵	8	11
宝物集	1	1
沙石集	6	17
十訓抄	9	5
発心集	15	10
保元物語	3	10
平治物語		10
平家物語	6	12
太平記	103	183

「この蘆もちたるをのことばせよ。かの蘆買はむ」

（『大和物語』第百四十八段）

これらの例では、ある事態に接した人物が、それを「見聞」きしたことに触発されて、ある感情や判断を持つという用いられ方が多く、漢文での使用傾向と一致する。『竹取物語』のように、男性作者による、漢文訓読の影響の強い作品においては、漢文の「聞此」「見此」の翻読によって、ある種の感情・判断を催すきっかけを表す慣用句として「これを見て」「これを聞きて」が用いられるのである。かつて渡辺実[2]氏は、女性作者の作品は作者の主観が登場人物のそれと交錯しがちであるのに対して、『伊勢物語』のように、漢文体に馴れた男性作者の視点は第三者的な視点を取ると指摘された。そのような男性作者の文章では、人物の感情やその原因を描く際にも客観的な立場から具象的に描くこととなり、その

原因を特立的で現場指示[3]の機能が強いとされる「これ」を含む当該の慣用句によって描写することが多くなるのであろう。このような事情から、他のジャンルでも軍記物や説話など、漢文訓読の影響がある男性作者の文章には、（表二）のように多くの用例を拾うことができる。

説話では、『三宝絵』などに「コレヲ聞テ」「コレヲ見テ」の他に、「コノ事ヲ聞テ」も4例見られ、用法も「コノ事ヲキキテ気ヲナケキ涙ヲナカス」（中・11）のように感情表現の原因を述べる用法で用いているのが注目される。『三宝絵』以外でも「コノ事ヲ聞テ」は『沙石集』に3例、『十訓抄』に8例、『発心集』に4例見られる。

軍記物語でも、「これを見て」「これを聞きて」ともに多くの例があり、『太平記』には「この事を聞きて」も14例見られる。この中で、『平治物語』では「これを聞きて」はなく、「この由を聞きて」「この由聞き」が多く用いられ、また、「これを見て」とともに「この由見」を多く用いるなど、『保元物語』にない傾向がある。

三、『今昔物語集』での使用状況

以上のように、「此ヲ聞テ」「此ヲ見テ」に相当するものとして漢文に「聞此」「見此」という表現が多数見出し得るが、和文体においては「これを聞きて」「これを見て」となる表現は『竹取物語』などの漢文訓読の影響を受けた男性の文章を別とすると、ほとんど用例が見られないことが判明した。これらのことから『今昔物語集』

（表三）

巻数＼用例	此ヲ見テ	此ヲ聞テ	此ノ事ヲ見テ	此ノ事ヲ聞テ
巻一	29	32		18
巻二	46	26	2	19
巻三	17	18	1	17
巻四	25	17	2	12
巻五	17	9	1	12
巻六	25	29	1	3
巻七	22	18		15
巻九	35	38	1	16
巻十	26	33		14
巻十一	25	21		7
巻十二	37	39	1	3
巻十三	25	26		8
巻十四	16	34		4
巻十五	31	53		5
巻十六	28	24		7
巻十七	18	58		6
巻十九	23	38		3
巻二十	38	33		3
巻二二	1	3		
巻二三	9	7		
巻二四	27	25		1
巻二五	11	20	1	3
巻二六	5	14		
巻二七	9	9		4
巻二八	28	22		1
巻二九	22	11		1
巻三十	6	7		
巻三一	11	12		1
合　計	612	676	10	183

表注　敬語を含んだ「此ノ事ヲ聞給テ」「此ヲ聞給テ」「此ヲ見給テ」などの形で用いた例を含んでいるが、成句的でない「聞キ給フト云ヘドモ」「此事ヲ聞継テ」「此事共ヲ委ク聞テ」などのように定型からはずれる例は除いてある。また、「此ノ事ヲ聞テ」は「此ノ言ヲ聞テ」「此ノ語ヲ聞テ」を含む。

の慣用句「此ヲ見テ」「此ヲ聞テ」という表現は、漢文における「見此」「聞此」によって生まれた翻読表現であると思量されるのである。

『今昔物語集』の「此ヲ見テ」「此ヲ聞テ」は、（表三）に示したように、天竺・震旦部において多く見られ漢文訓読文体の中で多く見られることが了解されるのみならず、和文体に傾く本朝世俗部に至ってもなお用例が多く、全巻にわたって広く分布していることが知られる。これに対して、「此ノ事ヲ聞テ」「此ノ事ヲ見テ」の形は巻十以前の漢文訓読的な巻に多く偏って見られ、巻十以降は漸減し、巻二十以降は用例が大幅に減少することから、漢文訓読的な性格をいっそう色濃く残した表現であると思われる。とりわけ「此ノ事ヲ見テ」の形式は「此ノ事ヲ聞テ」にくらべても用例が少なく、かつ、天竺・震旦部に用例が偏っているが、これは既述のごとく漢文訓読文で用いる翻訳臭の強い表現と意識され、一般的には用いにくいのであろう。

ところで、『今昔物語集』と類話を多く持つ『宇治拾遺物語』と比較すると、『宇治拾遺物語』では「これを聞きて」が3例、「これを見て」が9例が見られる。用法は『今昔物語集』と同じく、ある感情を催すきっかけを表す用法がほとんどであるが、これらの表現は『宇治拾遺物語』において積極的に用いられたものであろうか。

41外道のごとく思へり」と云々。和尚これを聞て、「定て様あるらん」と思て、……

（『宇治拾遺物語』一三七）

42譬ヘバ外道ノ如シ。更ニ触近付キ給ベカラズ」ト。陀楼摩和尚「猶、此二人ハ様有ル者ナラム」ト思テ、……

（『今昔物語集』四・9）

（表四）

作品	これを見て	これを聞て
宇治のみ	1	1
宇治今昔とも	6	1
今昔のみ	49	58

『宇治拾遺物語』に用いられた右の例では『今昔物語集』（四・9）に類話があるが、『今昔物語集』の該当個所で「此ヲ聞テ」を用いていない。同様に、『今昔物語集』に該当個所がない「これを見て」の例が『宇治拾遺物語』九四にある（今昔の二八・23と対応）。そこで『今昔物語集』との類話④を持つ説話について該当個所と対比すると、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』でともに「此ヲ聞テ」を用いる例は1例のみ（宇治一三六と今昔一九・12）、ともに「此ヲ見テ」を用いる例は6例（宇治三〇、九一、一二六、一三八、一六七、一八五と今昔一〇・36、五・1、二四・16、四・25、九・18、二四・22が対応する）である。（表四）には、『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』における類話のすべての用例について、共通してみられる場合と、どちらか一方でのみ見られる場合に分けて使用頻度を挙げた。表に示したように、『宇治拾遺物語』にだけ見られる例

に比べ『今昔物語集』の側においてこれを一方的に用いている例がはるかに多く見られる。また、両書にともに見られる例数は『宇治拾遺物語』の類話での全使用数（「これを見て」7例、「これを聞て」2例）のほとんどすべてに対応することがわかる。以上のことから、両書の共通母胎となった説話集にもこの表現は用いられており、『宇治拾遺物語』ではそのまま踏襲している場合が多いが、『今昔物語集』においては増補改変した結果用いた場合が多くを占めると考えることができるであろう。

四、「此ヲ見テ」「此ヲ聞テ」の機能

『今昔物語集』で「聞ク」「見ル」に続ける場合に、「其ヲ」を用いず「此ヲ」を専ら用いることは、井手至氏[5]も述べているように漢文訓読文の用法の影響といえるが、この慣用句は出典の漢文の中で用例の多い『大日本国法華経験記』等から具体的な影響を受けた箇所での翻案部の例や、増補部に用いられた例を挙げることができる。

43父母、此ヲ聞テ、涙ヲ流シテ、先年ニ子ノ僧ノ若クシテ失ニシ事ヲ語ル。本ノ持経ヲ尋出シテ見奉ルニ、實ノ二字焼失タリ。此レヲ見奉ルニ、悲キ事无限シ。（『今昔物語集』十四・12）

44（出典）父母聞此、流涙喜悦、見其持経。二字焼失。（『大日本国法華経験記』上・31）

43の後者の例は増補された例で、形も「此ヲ見奉ルニ」となっているが、この例のように後続の感情を表す語句に、それを強調する慣用句[6]「事无限シ」を付して用いられることが多く、『今昔物語集』独自の語脈を作り上げている。次にこの「事无限シ」を伴う例について述べる。

（表五）は「此ヲ見テ」「此ヲ聞テ」が「事无限シ」と共起する例数を挙げたものである。総数の一割程ながら、（表三）で例が存する巻に偏りなく共起例がある。なお表の例数は「此ヲ見テ」「此ヲ聞テ」

（表五）

巻数＼用例	此ヲ見テ	此ヲ聞テ
巻一	2	6
巻二	7	5
巻三	1	4
巻四	2	6
巻五	1	2
巻六	3	1
巻七	4	3
巻九	4	4
巻十	5	2
巻十一	4	1
巻十二	2	6
巻十三	4	4
巻十四	1	5
巻十五	6	7
巻十六	7	4
巻十七		5
巻十九	2	2
巻二十	3	1
巻二二		
巻二三		
巻二四	3	1
巻二五	1	
巻二六	1	
巻二七	1	
巻二八	3	4
巻二九	1	
巻三十		
巻三一	1	
合　計	69	73

の形のみの数を挙げたが、「此ノ事ヲ聞テ」や、右の例のような「〜見ルニ」「〜聞クニ」、さらに「見ル人」などの連体形などをはじめ「見ル」「聞ク」を用いる表現のバリエーションをすべて数えるなら、「事无限シ」の総数八四六例の中で約二九〇例が「見ル」「聞ク」を受けている（多い巻では、巻十一の「事无限シ」の総数四三例の中二十例）ことになる。そこで、「此ヲ見テ」「此ヲ聞テ」という感情を導く慣用句は、「事无限シ」という感情表現を強調する慣用句と結びつき、次の類型を取ると考えられる。

此ヲ見テ・此ヲ聞テ＋（感情表現）事无限シ

この類型は他書の例は稀で、管見では『三宝絵』の上10と中17の例（観智院本による。前田本では前者を「無極」とする）が最も古いが、中17の例「家ノ人コレヲミテ悲ヒ悦事カキリナシ」は『日本霊異記』の「親属見之、哀喜無比」（下13）が元で、これによって、『大日本国法華経験記』は「家人見此、哀憐無限」（法華の百八）とし、『今昔物語集』は「家ノ人、此ヲ見テ喜ブ事无限シ」（今昔の巻一四・9）とする。岩波古典大系『今昔物語集』の頭注では今昔の例は『大日本国法華経験記』を出典としているが、『大日本国法華経験記』にはこの類型を取る例が4例あり、筆者が主張する『今昔物語集』の文体との親縁性⑦を示す。（右の他に法華の四〇、九一、百五に共起例があるが、今昔の対応話では共起していない）。また、出典の中で「今は昔」の冒頭形式や歴史的現在の文体など今昔と近似の特徴を持つ『竹取物語』に、「これを聞きて」の形ではないものの「これをきくにうれしき事かぎりなし」（蓬莱の玉の枝）という例がある事も、同書に「これを聞きて」の用例が目立って多かった事とともに注目されよう。これらの受容を元にして、編者は、他の出典に対してもこの類型を用いるに至ったものと思われる。一方、『宇治拾遺物語』ではこの共起例がないが、『今昔物語集』の類話では次のように対応箇所に用いており、本書の独自性が窺える。

【慣用句の全体が『今昔物語集』だけにある例】

45努努、汝、此レヲ可遂シ』ト宣テ、道ヲ教ヘテ返シ遣スト思フ程ニ、活レリ」ト語ル。妻子、此ヲ聞テ、涙ヲ流シテ悲ビ貴ブ事无限シ。其ノ後、小財ヲ投テ、其ノ地蔵菩薩ノ僧ヲ綵色シ奉テケリ。

（『今昔物語集』十七・25）

46ねんごろに道教へてかへしつとみて、生きかへりたるなり」といふ。そののち、此地蔵菩薩を、妻子ども、彩色し、供養し奉りける。

（『宇治拾遺物語』四六）

【「此ヲ聞テ」が『今昔物語集』だけにある例】

47此ノ弟子ノ比丘ノ由来一〻ニ語リ給フ。大衆、各此ヲ聞テ咲ヒ嘲哢シ拠シル事无限シ

（『今昔物語集』四・7）

48大衆に此よしかたり給。人々わらふ事限なし。

（『宇治拾遺物語』一七四）

【「事无限シ」が『今昔物語集』だけにある例】

49大師、箱ヲ取テ見給フニ、底ニ針一ヲ入レタリ。此レヲ見テ驚キ騒ギ給フ事无限シ。

（『今昔物語集』四・25）

50提婆心え給て、衣の襟より針を一取いだして、此水に入て返し奉る。これをみて、竜樹大に驚きて、

（『宇治拾遺物語』一三八）

【『宇治拾遺物語』の語句が『今昔物語集』が慣用句で対応する例】

51里ノ者共、此レヲ聞テ、「然ツ崩レナム物カ」ナド云ヒ咲フ事无限シ。

（『今昔物語集』十・36）

52さぞくづるらむものや」などいひわらふを、里の物どもきき伝へて、おこなる事のためしにひき、わらひけり。

（『宇治拾遺物語』三〇）

以上、慣用句の成立するまでを、出典・類話との関連から論じた。「事无限シ」と共起する類型は『今昔物語集』以降の作品にも類例⑧があるが、本書では話の調子を歯切れよくしたり、段落末で印象的効果を上げたりするために多く利用されたものと思われる⑨。

おわりに

従来、『今昔物語集』の文体の類型的文体としての評価についてはさまざまな説があるが、本稿の取り上げた慣用句の面から言えば、漢文訓読的な特徴を示し、また個別的文体の要素を加味して言えば、作者が内容的にも重視したであろう『日本霊異記』『大日本国法華経験記』や『竹取物語』『三宝絵』など特定・少数の出典の文体を継ぐものであることが明らかになったと思われる。これらの出典の中で、既述の類型をとる総数は多くはないが、『今昔物語集』の編者は、それを印象的な表現として受容し、多く活用したと考えられるであろう。

ところで、和文体的な『宇治拾遺物語』の類話と比較するとき、『今昔物語集』では「事无限シ」と共起する類型の表現が『宇治拾遺物語』では様々な表現で対応している事を指摘したが、このような差はどのようにしてできたと考えられるであろうか。この慣用句の類型は『今昔物語集』では集全体に渡って見られるのであるが、他方『宇治拾遺物語』と同じく『打聞集』『古本説話集』などでもこの類型がないことなども考えあわせると、宇治大納言系の説話の中では『今昔物語集』独自の表現であることが明らかである。通説のように、これら説話集に共通母胎的な作品があったとすれば、『宇治拾遺物語』は母胎の作品が漢文訓読体風の表現をとっていたものを和文体風に改変したと考えるより出典の表現を比較的忠実に受け継いでいると考えるべき蓋然性が高く、他方『今昔物語集』は

右の類型を用いて和文風の出典の表現を漢文的な表現に改変を行ったと考えるのが自然であろう。これら四書にさまざまな表現の異同があることの意味については、なお種々の面から考察する必要があると思われ、別稿を期すこととしたい。

注

① 本稿で検索・引用に使用した資料は、次の通りである。
物語・日記類は、『竹取物語』『蜻蛉日記』『伊勢物語』『大和物語』『源氏物語』『更級日記』『狭衣物語』『夜の寝覚』（以上、岩波日本古典文学大系）、『宇津保物語本文と索引』（笠間書院）、『浜松中納言物語総索引』『栄花物語本文と索引』（以上、武蔵野書院）。古文書・記録類では、『古事記』（岩波日本古典文学大系）、中村啓信『日本書紀総索引』（角川書店）、『日本書紀』（吉川弘文館国史大系）。なお、『平安遺文』『小右記』『御堂関白記』『後二条師通記』『殿暦』の検索には、東京大学史料編纂所のデータベースを使用した。説話・軍記は、『日本霊異記』（岩波新日本古典文学大系）、『今昔物語集文節索引』（笠間書院）、『今昔物語集』（日本古典文学大系）、藤井俊博『大日本国法華経験記校本索引と研究』（和泉書院）、『往生伝・法華験記』（岩波日本思想大系）、月本直子・月本雅幸『宮内庁書陵部蔵本宝物集総索引』（汲古書院）、深井一郎『慶長十年古活字本沙石集総索引』（勉誠社）、泉基博『十訓抄本文と索引』（笠間書院）、高尾稔・長嶋正久『発心集　本文・自立語索引』（清文堂）、坂詰力治・見野久幸『保元物語総索引』『平治物語総索引』（ともに武蔵野書院）、境田四郎『宇治拾遺物語総索引』（清文堂）、『宇治拾遺物語』（日本古典文学大系）、西端幸雄・志甫由紀恵『土井本太平記本文および語彙索引』。漢文類は、東洋哲学研究所『法華経一字索引』、斯波六郎『文選索引』（中文出版社）、平岡武夫・今井清『白氏文集歌詩索引』（同朋社）、『CD-ROM版大正新脩大蔵経釈経論部』（大蔵出版）。『本朝文粋』（岩波新日本古典文学大系）。

② 渡辺実「文体論」（『国語教育のための国語講座』朝倉書店　昭和三三年）は、平安女流文学作品の特質として、表現主体から受容者の分立がほとんどなく主観的当事者的把握に富むのに対して、伊勢物語などは、社会全体の平均的代表者の立場から冷静な第三者の立場から書くとされる。

③ 神谷かをる『仮名文学の文章史的研究』（和泉書院）の「物語文章史と指示語」による。神谷氏は『竹取物語』で「これを」が「見る・聞く」と多く結びつくのは「具体的日常的行動を描きつつ述べていく一種の雅さ」によるとされたが、本稿では、漢文訓読による慣用句と解釈したい。

④ 類話は岩波日本古典文学大系本『宇治拾遺物語』が指摘する八二話。

⑤ 井手至「文脈指示と漢文訓読」（『国語学』第一二一集　昭和三〇年九月『遊文禄』（和泉書院　平成七年）所収）は、今昔では、「コソアド」体系による「相対的指示」でなく、「此レ」による「絶対的指示」で用いる事を、漢文訓読の影響であると指摘する。

⑥ 山口仲美「今昔物語集の文体――『事无限シ』をめぐって――」（『国語学』29集　『平安文学の文体の研究』（明治書院）所収）に文体的意味を多角的に検討されている。また、これを承けて筆者も「『事無限シ』考」（『京都橘女子大学研究紀要』第17号　平成二年十二月）で論じた。

⑦ 拙稿「今昔物語集の文体と法華験記――『更ニ無シ』をめぐって――」（『国語学』173集　平成五年六月）で論じた。なお、一般の漢文・変体漢文では「事无限シ」自体が少ない事は⑥の山口論文に指摘がある。

⑧　例えば、『発心集』に、「義叡是を見て喜ぶ事かぎりなし」（巻三の十二話）「永心、是を聞くに、哀れにいとおしき事かぎりなし」（巻四の二話）のような類例が見出される。同書では、慣用句以外に、「さまざまの不思議を見、聖の詞をきくに貴くたのもしき事かぎりなし」（巻三の十二話）のように、用いる。他に、『法華百座聞書抄』には「コレヲミルニイヨイヨタウトクカタシケナキコトカキリナシ」（オ151）のような例もあり、漢文訓読的な文章に少数ながら見出されるのが特徴である。

⑨　拙稿「今昔物語集の否定表現――本朝法華験記への増補をめぐって――」（『同志社国文学』第41号　平成六年十一月）で述べた。